

# ダウン症生徒の自己選択と意思の表明に関する支援

—知的障害特別支援学校における休み時間の過ごし方の取り組みから—

佐藤義竹 工藤傑史

(筑波大学附属大塚特別支援学校)

KEY WORDS: 自己選択 意思の表明 余暇活動

## 1. 目的

「障害者差別解消法」(平成 28 年 4 月施行)では、休憩時間への柔軟な対応や一人一人に応じた意思伝達への対応が述べられている。休憩時間を「どのように過ごすか」については、一人一人の興味関心や得意とすることにより様々である。学校生活においても、適切な方法で自分の意思を相手に伝え、休憩を過ごすことは本人の生活をより豊かにするものとする。そこで本研究では、休み時間の活動レポーターが少なく、自分の思いを適切に表現することが難しい生徒に対し、段階的な環境の調整を通して、自分の好きな活動を選択し相手に伝えることを介入の目的とした。

## 2. 方法

(1) 対象生徒：知的障害特別支援学校中学部 1 年に在籍するダウン症のある男子生徒 1 名。有意味語の発声は無く、自分の思いを不適切な行動(物を叩く、物を床に落とす、机の上に足を乗せる、など)で表出することが多かった。排泄や着替えなどの日常生活面においても支援を必要とした。文字の理解は難しいが、提示したイラストや授業の記録(写真・動画)によく注目する様子が多く見られていた。休み時間は、活動レポーターが少なく、不適切な行動をすることで周囲の注目を得ようとしたり、布のような物をひらひらさせて過ごしたりすることが多かった。そこで、休み時間の活動レポーターを増やすこと、望ましい方法で自分の思いを伝えて余暇を過ごすことが必要だと考えた。

(2) 実施期間・場面：X-1 年 9 月から X 年 2 月までの 6 か月。学校生活内の休み時間(10 分～15 分程度)を対象場面とした。

(3) 標的行動の選定：自ら余暇活動を選択し、教師に伝えることができるよう、「教室内の個人ロッカーに提示した活動カードから自分の好きなカードを選び取り、教師にカードを渡す」こととした。教師にカードを手渡すことで、選択した活動に取り組むことができるようにした。

(4) 余暇活動(種類)の選定：家庭訪問時の生徒の家庭での様子や保護者からの聞き取り、学校生活での生徒の興味関心から、映画の挿入歌を聴く(以下、シリーズ 3 作品を“A1”、“A2”、“A3”、異なる 1 作品を“B”)、太鼓を演奏する(以下、“C”)、三味線の音楽 CD を聞く(以下、“D”)を選定した。

(5) 標的行動の評価：標的行動を課題分析し、生徒の様子を録画したビデオをもとに担任が分析した。各課題に対して、生徒が一人で遂行できたかどうかを記録し、セッションごとの自発遂行率を算出した。

(6) 支援計画：1 学期中の生徒の様子を踏まえて、2 学期から実施した。P1：本人の動機づけが高いと思われるカード 1 種類を提示して実施。P2：2 種類のカードから選択。P3：4 種類のカードから選択。P4：スケジュールカードの一部として、「①学習→②トイレ→③休憩」のように実施。「休憩」になると、担任が 4 種類のカードを提示して好きな活動を選択するようにした。P5：P4 で使用したスケジュールを生徒がより分かりやすいように改善して実施。

## 3. 結果

結果を Fig.1 に示した。P1：1 セッション目に教師の支援を必要とすることが多くあったが、回数を重ねるごとに自発遂行率が高まった。P2：P1 で手続き自体の理解が確認できたことから、カードを 2 種類用意し、どちらか好きな方を選び取るようにした。83%以上の自発遂行率が維持できた。P3：選択肢を 4 種類に増やした段階でも、自分の好きな活動カードを良く見て選び取ることができ、全 4 セッションで 100%の自発遂行率が維持された。P4：P3 まで高い自発遂行率が維持できたことから、スケジュールの一つとして実施した。学校行事に伴う特別時程に切り替わった 11 月 17 日、18 日の 2 セッションは 63%とこれまでと比べて低い遂行率となった。P5：スケジュールの様式を生徒が分かりやすいように修正を加えた。全 3 セッション連続して 100%の自発遂行率が維持できた。

活動カードの選択は、ほとんどのセッションで A1 を選択していた。意図的に A1 を選択肢から除外した際には、提示したカード群の前で立ち止まり、教師に視線を送ったり教師の手を引いたりして A1 のカードを提示してほしいことを伝えようとする行動が見られた。

休み時間の活動レポーターの少なさや意思表示の難しさから、不適切な関わりが見られていた生徒だったが、今回の取り組みを通して、毎回の休み時間になると自らカードを選択するようになった。教材を工夫することで、選択肢を通して自分の思いを相手に伝えることができるようになった。授業場面においても、グループ学習における生徒の役割として、生徒が興味関心のあるカードを選び取るようにした。休み時間における選択方法と同じ教具に配慮したことで、教師の支援が無くても、自分で選択し相手にカードを手渡して伝えることが見られるようになった。

## 4. 考察

自分の好きなこと、興味のあることを『やってみたい』という「思い」や「願い」を進んで表明できるように段階的に環境を調整したことで、適切な方法で相手に自分の思いを伝えることができた。また、本人にとって休み時間が楽しい時間、次の活動に向かって気持ちを切り替える時間となった。様々な状況(場面や人)の中で、今回の取り組みをどのようにつなげていくのかが今後の課題である。



Fig.1 標的行動の自発遂行率 (SATO Yoshitake, KUDO Takeshi)